支え、認め合う日本に

甲州市立松里中学校三年　荒井　皇祐

私は日常生活に少し支障が出てしまう病気を患っている。卵アレルギーに、軽度のアトピー性皮膚炎。私は今まで比較的小規模な保育園、小学校、中学校で育ってきた。小規模であるが故に、どうしても私のような人は珍しがられてしまう。今は体が成長してきたこともあり、卵は加熱さえすれば食べられるようになった。しかし、小さな頃は食べられるものがかなり限られてしまい、給食ではみんなと違うメニューが出たことも多くあった。その時周りからは、「なんで違うメニューなの？」「これ、嫌いなの？」などといった疑問の声、「お前だけ違うのなんでずるい」「お前もちゃんと食べろよ」といった非難の声も私に浴びせられた。私は当時まだ小さかったこともあり、自分の体のことを友達に伝えられなかった。このようなたくさんの嫌なことを私は経験してきた。アトピーも同じだ。中学生になった今も痒みが酷く自分の腕や足、顔を掻いてしまうことが度々ある。友達が言うには、その私の姿はとても痛々しく見えるそうだ。顔が痒く、掻いてしまい目が腫れてしまっている時に、「お前泣いてるの？」と面白半分で言われることもあった。もちろん良い気持ちにはならなかった。人とのちょっとした違いでハンデが生まれてしまう。このちょっとした違いを持つ自分に、私は嫌悪感を抱いていた。

そんな私だが、家族や先生、友達など周りに私のことを理解してくれる存在がたくさんいる。この存在のおかげで、私は今まで楽しい生活を送ることができている。宿泊学習や修学旅行のときに、私が食べられない卵を私の友達は嫌な顔一つせず、「全然大丈夫！俺これ好きなんだ！」といって私の分を食べてくれた。また、たくさん薬を塗らなければならない私に先生は気を遣ってくださった。このような存在がいたからこそ、私は宿泊学習や修学旅行でも仲間のみんなと同じように楽しい時間を過ごすことができた。私を認め、支えてくれる存在がいなければ今私はどうなっていたのだろうと考えてしまうほど私にとってその存在は大きいものであった。本当に感謝してもしきれない思いだ。

私は正直、私に対して嫌なことをしてきた人達を良く思わず、恨みという気持ちを抱いてまでいた。しかし、そんなときにある母の言葉で私の気持ちは変わったのである。

「理解してもらおうと待っているだけじゃ絶対に何も変わらない、自分から理

解してもらおうと努力しなきゃ。」
私はハッとした。この言葉の通り、私は自分から理解してもらおうと努力していなかった。卵が食べられないときも、体が痒くて仕方がないときも。そもそも私はみんなにとっては当たり前ではなく、少し違っている。だから分からなくて当たり前だったのだと母は言った。それから私は、とにかく自分のことを自分から発信するよう、心がけている。自分から伝えれば相手も大抵の人は理解してくれることがわかった。自分にはアレルギーがある、自分が肌が弱いと自分から自分のことを伝えてみんなに承知してもらっている。そのおかげで、今は昔よりもみんなから理解されているような気がしている。

私はこのような経験から、自分に何ができるかと考えてみた。そもそも人間というのは自分と違う意見や人を受け入れづらいということがあるらしい。私は、当事者だからこそわかることが多くあると思う。だから自分がそのような人たちに対して一番の理解者になってあげたいと思う。そうして、自分が理解していることを沢山の人へと広げていきたい。私も最初は理解してくれる人があまりいなかった。しかし徐々に自分への理解が広まっていき、たくさんの理解してくれる人が今いる。その存在があったからこそ今まで楽しい生活を送れている。一人でも自分のことを理解してくれる人がいることによってとても大きな安心感につながるのだ。自分も相手のことを理解してあげ、どのような人にでも居場所を与えてあげたい。

今私達が住んでいる日本には、私のように軽度ではあるが生活に支障が出るような病気を患っている人、命に関わるような大きな病気を患っている人、体に障害がある人など様々な人がいる。私達がそれを良い意味での個性と捉えるのか、それとも悪い意味での個性と捉えるのか。良い意味で捉えれば優しい気持ちが生まれてくる。しかし、悪い意味で捉えてしまえばその人を罵ったり、差別をしてしまうなど、その人をどんどん追い込んでいってしまう。病気を患っていても、障害を持っていても、みんな同じ人間だ。すべての人間が人間らしく生きるために、自分には何が出来るか考えてほしい。ほんの僅かな心遣いでも、その僅かな心が相手にとっては大きな安心につながるのだと思う。お互いがお互いを認め合い、支え合う。そんな社会になればもっと良い日本になるのではないだろうか。